

河川における行動分析

仙台二華高等学校 ○伊村うらら

仙台二華高等学校 ○立花 李夏

仙台二華高等学校 米本 慶央

東北大学大学院 正会員 風間 聡

1. はじめに

河川は郊外だけでなく市街地にも流れており，人間と自然の共生を図るうえでの利用価値は高い。しかし，それらは海や川などの自然環境と比較して利用者が少ない。国土面積の小さい日本ではデッドスペースとなった河川を最大限利用するとともに，より良い人間と自然の共生を計るべきであり，その結果として河川の利用者の増加が重要である。そこで行動分析を行い，河川に人が来る方法を提示することを本研究の目的とした。

2. 調査方法

先行研究の空間構造図と行動分析を参考にした¹⁾。河川空間を利用する人々の定点観測をするために，9月3日（木）15:00～16:30と9月5日（土）7:30～17:30に広瀬川中流の宮沢緑地へ行き，行動パターンや利用状況の調査を行った。

3. 調査結果および考察

利用目的と利用者数を表1に示す。佇む人のうち，ベンチを使う人は少数であり，煙草を吸う人もいる。利用のほとんどは河川域でなくても可能なものが多い。ボートに乗る人は，BBQなどの他の活動で来た人が多く利用していた。

河川の利用者数の時間変化を図1に示す。利用者数は目的によらずその時間帯の合計である。ゲートボールについて河川高水敷にコートがあるにもかかわらず，利用している人が一桁しかおらず，利用時間も7時30

分ごろしかなく，効率的とは言えない。ピークの時間帯は8時，10時，14時と3回存在した。一方，12時と13時に急激に利用者は少なくなった。食事のために人通り

表1 河川の利用目的と利用者数

利用目的	利用者数（人）
歩行（人のみ）	321
自転車	228
ランニング	122
歩行（人＋犬）	38
佇む	32
虫取り	20
ボート	14
野球	12
ゲートボール	6
その他の運動	15
その他	24
計	832

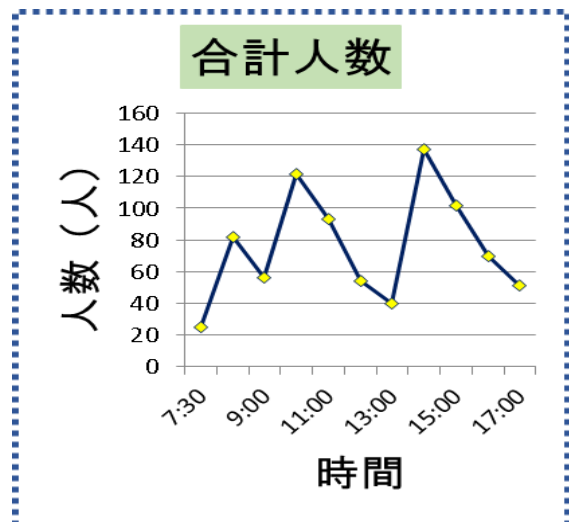


図1 河川利用者数の時間変化

が少なくなったと考えられる。図3に利用目的別の利用者数の時間変化を示す。10時頃にその他の人数が急激に増えたがこれはBBQのグループが来たためである。14時以降は活動していた人が帰り出した時間帯であり、同時に来る人も少なくなっていった。図1で見られた3回の利用者数のピークについて、主に8時は歩行、スポーツ、自転車で構成されており、10時はその他と自転車、14時は自転車と歩行とその他で構成されており、その構成が若干異なる。犬と散歩に来る人は、他の活動と比べて時間ごとの差が少なかった。スポーツは午前中に多い傾向があり、歩行のみは午後が多い傾向がある。

河川の利用目的の空間分布である空間構造図を図3に示す。ほとんどの人が基本的に整地された道に沿って進む。道において、男性は女性の2.75倍であり、自転車の利用が最も多かった。川の水を利用する目的に来ている人（ボート・釣り）は6人、河川空間を目的に来ている人（野球・一輪車・虫取り・ランニング）は36人、道として利用している人（自転車・散歩）は80人であった。本結果からは河川の利用において河川そのものより河川の持つ広い空間を利用しているケースが多い。

4. まとめ

1日に訪れる人の数は想像以上に多かった。宮沢緑地は道が整備されているのに加え、ゲートボールコートやベンチ、ボートのりばなどの利用設備も多い。利用している人の半数は歩行や自転車の人が多く、普通の道路がある中、あえてこの緑地を通る人がいた。整備された道はきちんと利用されているといえる。一方で、緑地に滞在し

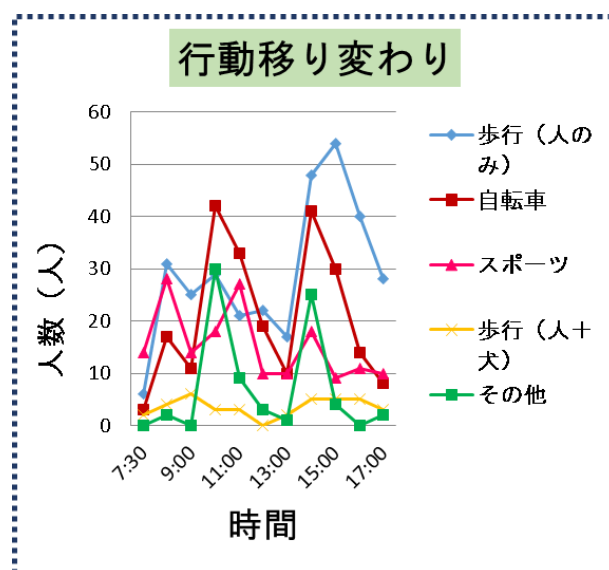


図2 利用目的別利用者の時間変化

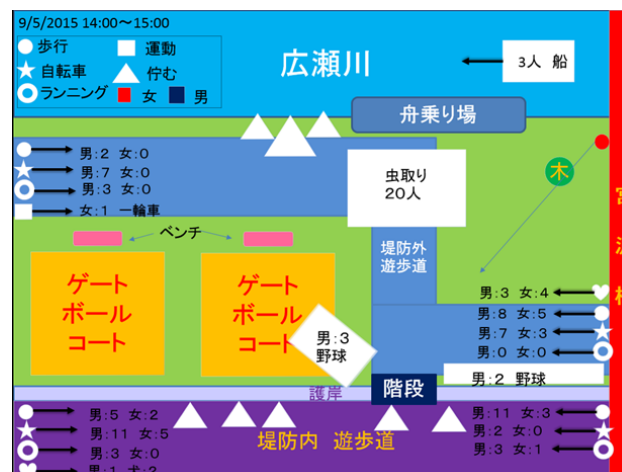


図3 利用目的別空間利用分布

て活動する人はあまり多くいなかった。設置されている設備もあまり利用されておらず、改善がまだ出来るのではないかと考える。

謝辞：本研究は文部科学省スーパーグローバルハイスクールと東北地域づくり協会の補助を受けた。また、東北大学の川守田智氏の援助を受けた。併せて謝意を表す。

参考文献

1) 松田達生, 河川における空間構造と行動との関連, 東北大学修士論文, 2008.